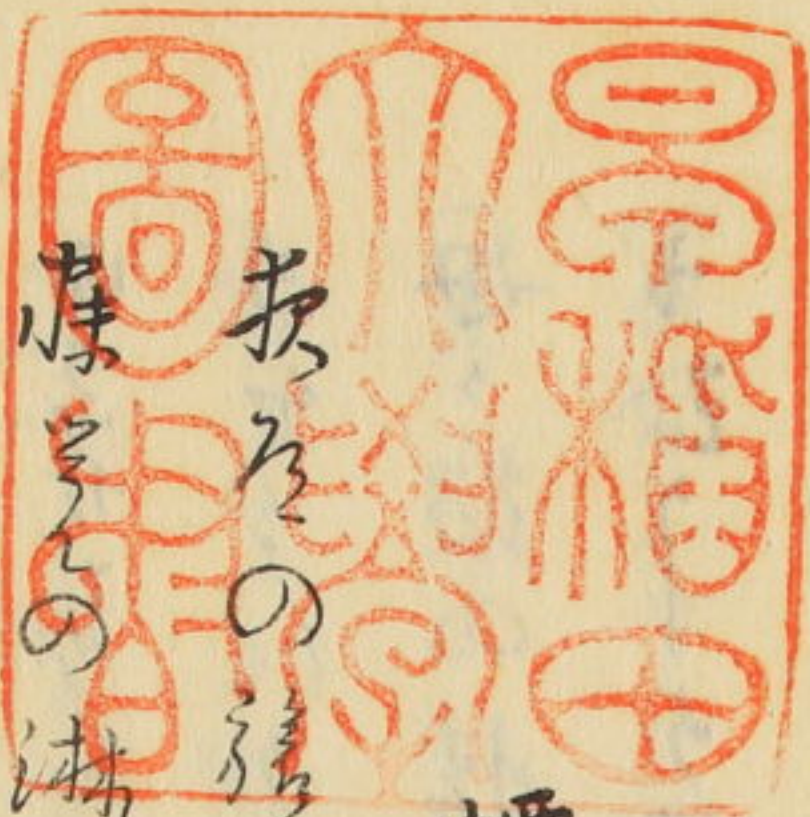


門 へ 5
4434
巻 3

續編

昭和九年
九月二十九日
購求

鈴木



煙草説

秋の暮れはわさきとて腰に茶瓶も持てて秋の
暮の淋しきとて棚の経ももれとて母と只この
煙草はなとあるとて今詩酒の三つもまらへりて
埃のまゝ杭をさしとて小侍従の侍宵あつて遠藤九年
の朝にむかへて炭園のまきを悟り西村ハ柳陰ハ
まじり火打の光と集むされと出女のまきせるハ夕れ
乃ねにあされと口紅元と吸ふと少ハ公つらひと
んと形影の経きせるハ舳さね子葡萄とて明乃

月と詠あゝ大漁く吸く投くりよいうよのちれ
やうあゝむやとあき唐麦子候子張の煙多益を
あゝ多教子引くくくくくく路次れ候今よ吸口包
くくくくくく風路あれとさくよ辞義今もある
九へー只あゝくくくの松陰よかゝくくく九ま
せは茶釜の囀のさくをねく蛇くよ藁火もあゝく
さー出くく一瓢千金れくくくく時さくあやまゝハ
雲をたぐくやのくくく先の夜場といあゝく烟打の
まやうにん着さくあゝくくく吸くくくくくくくく
母、飯の嬉よりうきくくくくくくくくくくくくく
もむくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

たのの雲蓮よあゝくくくくくくくくくく酒ハ
富貴ある者あり茶ハ屋邊ある者ありくくくくく
つら君子の妻よあゝくくくく用時ハ一巻に書を起く
あゝくく時ハ神れうらに候くくく神祇の傷ありく
りよー下戸と候あゝ世にれくくく下戸ハ控あゝく
今や稀あるくくくくくくくくくくくくくくくく
も吸くくくくく入の風路思よさうんよまやるれ物さ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
山の雲をさくくくくくくくくくくくくくくくく
まやるくくくく通く灰吹くくくくくくくくくくく
あゝくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
実候さうーあゝくくくくくくく

葛井記

つのかやりにこれ葛井也ある山より^{温泉}で由あり年ころ
ふやめる病疾よりころころとてさくららには七月の
ころあがり屋敷と舟出しく素名にころあがり川
ころころとてころころとてころころとて

時ころは夕ころころとてあがり川

このまにんころころとてころころとて酒もあがり
候ハ秋のきの名のころころとて秋もあがりころとて
ころころとて繪井ころころとてころころとて

誰ころころ扇の繪井れ花つころ

ころころとてころころとてころころとて店に尻みけ
ころころとてころころとて外隣あり碇ころ

これよりハころころとて細くあがりまをころころとて谷を
ころころとて雲より雲よりけりけり世の外遠くころころ
お地ころころとてハあつころころの中ころころとてハ
似もやころころ湯本の家ハころころ二十ころころとてハ
乃家あつころころとて古市ありころころとてハ
女もころころとてころころとて系竹ハ字をころころとてハ
多郎山ころころとてころころとて峯の松風ハ線ハ音ころころとてハ
谷水ハ脂水のころころとて濁ころころとてハ外の山甲ハ
ころころとてころころとて湯入のまころころとてハ湯けころころとて
ころころとてころころとてころころとてハ人の人ころころとてハ
ころころとてころころとてころころとてハ山甲ハ秋の
ころころとてころころとてころころとてハころころとてハ

たけしにさし出さるるおぼあさるる一四の家の名も
橘をよつたにききしやうりかきして若かり襖ま
つとてこころにみれし〜〜〜諷いさくくま

あまのねん〜〜〜津やふ〜〜

田の口等

湯の山やあ〜まにさるる深ゆき

幕ハ湯にゆつ〜〜秋の移る形

山の上の葦原をあり〜岳寺と名のみ〜〜
回祿あり〜る後〜〜〜に〜〜み〜〜
咽れり〜〜ハ堂をれ男あり法原ハあり〜

待つ〜〜や刺〜ぬあ〜ぬ〜若柳

六日ちりの月山のそに〜〜〜風も湯ありのあり
〜〜〜
つ〜ぬ

笛よせぬ湯下駈もよる鹿の聲

つ〜ぬ〜あ〜〜〜あ〜〜ハ〜〜らみ〜〜り
〜〜〜大石と
名に〜〜あり

交病〜〜積と月〜〜石れ上

青澁とい〜〜の山〜〜〜西〜〜

青澁やぬまに音き〜〜初あじ

この山下あ〜〜火あり人の亡魂〜〜

〜〜〜秋の風

我名〜〜み人の名〜〜〜の〜〜
〜〜〜

あまごといつる魚とりよあるとさきよくもあつちり
こくに明らねとよあつてそ樹といつるあき借あり
下もある象我まよとさして淋しさまきさくいつきとも
あわりのさる思教も二出うさうり今ハとてうつる日ハ雨は
あつちり

湯まぬきしり一社の果や秋の雨

さうりのさる思教のさる玉よあやとさつけけるはハ乙亥の
年にあんまらる

樂老彦之像賛

陰浪の月とあは河におくむ一りあは茶ま折あ
へしと二つのもにあつくさむハ樂老彦のあやあつち
さあつちさきに替る一と

酒子待茶に待つてく月二枚

とつるハらの友紫原甲れ某うりあつちのあつちるあり

清奥州株人辞

未成の事由を説く株人雅伯
謝る辞は也

世ハハ芦垣のるちき軒とあつてくさよふあつちとら
まつちりもせぬあつちあると遠手清奥のふもさつち
かつちり一句と添つちの他のさるあるよ一さつちある
硯を踏つちりまよあや一志のさつち摺つちれあつち我
あつちり人さつちあやさつちのほせ一風あつちよと
そのまよ名つちる駭あ島彦主の何一とやうのあつち
しめ株にりある序ハ我名つちりさつちるよりさつち俳門

乃友ありとて夢せぬつりとてされ我及まぬけり
か入きてより菫門の人とまきけと皆十年れ舊相
のこゝとさつるさつる我あつてもうるをのあつても
うまうま佳のりいれらるる一は神にくらさるり
あるも遠きあつるの思とさつるさつるのを比とすれ
しりあき麻のまきけとる

朱砂にまつ手澤を心忘れさせ

その也 昔を思ひにせしをさすに終る杖をいさる

あつてもあき中も奥羽は秋のついでとて奥の

細谷の行りさあつる一は句八人の平口は強きと
こゝに申し一まきけとまきけと仕友にさされ
く雄をあはせやまきけとまきけと欲する秋の
さつるさつる一交のさつるさつるの千等れ
うみいよも物も較あつるさつるの秋も浅うむされ
能因の一首とさつる一は句八人の人におしと
さつるさつる

あつる川もさつるにさつる秋の風

一色真記

豆州熱海に寓居の時渡をさすたうとら
あつる求よりと記す

所は浴一詠一ととむと行る一はさすのさつるあつる
秋もさつる入の羽ありさつるはあつるこれ湯本は二月をり

のやうりらるるあつとせら我を若れ母らにまらうん
まのせりて才のこもあつた穠林あうう舊病幸の折
をねく疝氣れ腰を温泉に浴し浮せれ耳を洞あに
洗ふされしけ里れ地現ううい山うこみ海はかりうり
波こつかりにゆせく月の寐るに松を支ちせく鹿の
書え巴峽の猿にまらう雨のつせくよ不血ととれと鯉の
利刃松江の鱸は耻と伊豆の松山あふせつう遠久う
のうう山形かまひ紀信正のま眺と吟魂とあうこま
岸しく旧迹とらうあ沖の小と島ハ朝夕にうれととあれ
大と島ハや波流ううり雪時とあうれ書らうりて
ううらもらうらまあきまのこらうのふとえあう眺
とらうららうらうらあれとあうら東面とらうき湯入の

あつの目とらうこらうら中よ波と色氏某う真ふらうまらう
うらうらうき樓ううまらうむう一佐文山こらうまらうらう
之字の歌うらまらうとらうせうらう一色真下の名によらう
膝王崗の越ちうらとや落霞孤鷺と齋しく飛いとの
長天と共ある海つうの秋と今にう浦のみらう軒端
まらうらうこあうらあまの庭のうらうとせらうてわ
うみまらうらうかりうてあうらこらうらうらうらうらう
とらうらう人もこらうとせらうとらうらうらうらうらう

いありてせらうらう軒の浦の月

とこ今画替

かどより小町う才の果うあうら縁讓う忠のちうらう

よもあはれにわらうこそをさすはさくし厨子肥肉と遠きけて
仁政地をこのまに及よへく臣うくこれと志すは
つよに飽満の恩澤を省て報國の志をいつてこころ起
さし心ちく泣せぬれとこころれとえかれとあま
きくは花よ一盃のらうはさうやとくきくに飯汁の太
や心へきさやあられ世の人心解の目のくよのみ
つきて積のふれ及びあつたのらうんととあふ佛と
香華よまらうくくこの黄金れ肌を羨むよりい
よーこれと起たに詠く薦一飯と志すこころ
とこころくゆあま画誌と

十六枚紙

いさよの月とと勢田沼よみよいさくに行
あまーまけく世帯るもとあーく巨口
細鱗もあつたにりく斗酒ハヤと坡
う妻の才えもくは海老者も園も漕を形れとま
あま月の海つたにのちとこころいや早崎のよ
月みよく啼あつたや其もあつたあ乃
くけとめて成秀う門敲多くこころいかに山
くあつた呼聲の淡松風の里波のみよあま
まりり西湖江湖の秋風も今もあつたあま
河よあまー茶たさくや法興のあつた
あつたあまあつたあまあつたあまあつた
あつたあまあつたあまあつたあまあつた

寂しきこころの例の書さるるのしるしにあらはれぬ
袂とあつてしるし又一盃とあつてしるしに白き心乃
續れあつてあつてしるしにあらはれぬ

つづきれぬにあらはれぬの月を舟

蝶の付

蝶さるるまゝにゆく飛さるるまゝにゆくあつてしるしに
のしるしとあつてしるしにあらはれぬよくあつてしるしに谷を
海さるるまゝにゆく空をまゝにゆくあつてしるしに
走さるるまゝに人と免さるるまゝにあらはれぬとあつてしるしに
とあつてしるしにあらはれぬとあつてしるしに詩つてしるしに
とあつてしるしにあらはれぬとあつてしるしに

捨つてしるしにゆく俳諧とあつてしるしに下をあらはれぬ
あつてしるしにゆく蝶さるるまゝにゆく名のりりりやとあつて
しるしに今さるるまゝにゆくあつてしるしにあらはれぬとあつて
しるしに人の詩とあつてしるしにあらはれぬとあつてしるしに
つづきしるしにあらはれぬとあつてしるしにあらはれぬとあつて
しるしにあらはれぬとあつてしるしにあらはれぬとあつてしるしに

二日月堂記

應大者根成頼忠需

とあつてしるしにゆく故人のまゝにゆくしるしに調をあらはれぬとあつてしるしに
あつてしるしにゆくあつてしるしにゆくあつてしるしにゆくあつてしるしに
あつてしるしにゆくあつてしるしにゆくあつてしるしにゆくあつてしるしに
あつてしるしにゆくあつてしるしにゆくあつてしるしにゆくあつてしるしに

いづれかいつかへりぬきねとあるか一生のやうなうたれと
け府下りしては何れ一法のうらをよめとさして其のよ
まされさるるか一室のけ一句のいふらん格の語一
物のよれつらうのいふ濃のねもはやく丹生の款を六浦
のありちも今にわらうしき名をうりあるをいふい
ずれいふく月のよきとあきて離れもまじ世にこた
も昔をいふいふあまの人のたれかこまあくあまうさ
へきさをよめあまのあー朽せぬをよとて遠まよ
堂よ名つちく此句れ光りやすいけいけいけいけい
雲上の屋もあ底の魚もうと騒ぐす鉤とうさうら
ちしてあまも代あも一交いけいけいけいけいけいけい
とて日月の二日月あるあめけいせいのうさすい
いついけきの濃あいひとて

積のよに磨つともいふいけいのあ

翁像賛

るが古池のつよいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
柱のよい月のまあいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

音曲説

今核朗詠といふむかいは難いことやまじく
催るあまのいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
幸あまのあまのいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
として一交あまのいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

川と出く東北の方きくらく十歩の杖と曳けて指
万尋の山横おれ眼下千町の田つちやと村落畫圖
乃中子入る南の言くくの赤林さく雪海の浦風しとく
とや勢田深し名のみこして良は交あめの日も多うり
やとゆらぬれ路やうも細りとくあうつ声虫のきりよと
よりハあきを地さるハ杖さの里も道りれとあうり
年らぬ年うりり垣の杖の道りぬとくも山本も道
あうりゆのくうもせれまよハ一二のこもさあくれとあ
さんくに片屋も道りりされと名けとくあうり
まうの穂氏、毒雨もも道りりす何う一黄門のあうれま
道りす只これ定名ハ似しれとあうりて多宿の老母
とくあひまもまこしとくあうりあうりあうりあうり
侍うりて我ハを申きてま申もとくもまて府城の辰巳
あれとせとくうりり人ハいりりんも

百魚譜

人ハ武士相ハ槍の斗魚ハ鯛とよみ並りる世の人乃口
まもるるそのりさゆくある物もさるあれともけ魚と
かて調味の完上とてまむ答あるへくもさるうけく甚
み存る。男うりすハ外ハ似るへくもさる一あうりさうり
まもるるうりてうりてに堂敷の沙汰もすくはまよ
りり仙人もあうりされと夷之命あうり地の葉氏者ハ
同もみけとくまもさる約もこれぬと務と舞の司
といハ食味もあうりる理也何とくさるれと料理

是と学ひし人ハむう一思あるをきこしとてあ
しり

松門流子のちんとうり多きうとありけりくも大聖
の学よしけをこめせあるこれと世の名声ハの綱つなの
並むとすれといふある幸よあむ味ハ羨ありと
いへとも綱の料のふとあるふあるへくとも一乾物
多物にせ給清す清によう一とすらす一蒲幹
子用いへく増も給も調せ給品一とありあつてもと
まるハ多能と恥といひんそ中もあまれとせつる昔
平家よ悪七兵衛景清と名乗る今氏あるハ泣子も
威をへく朝比奈赤黄二肩をあつんとすあつるに記
録の上ありてハ輔まろ夷ハ外ハさせり働るくくは

二所まもるもあつるありつとあは侍ありつと世に
名れいへく一とせよある人評しつとあつるあ
く七系もあつるあり

松江の右春我朝もあつるつと張氏ハとと秋風
さのく仕途を辞一平家ハとと船中ハとと官路ハ
進正進退いつれさうやむへき

解ハ進退の洞庭の名をくくつと鯉ハ似く位階ハ
斗り名ハ知まひさつとこれと給ハまは堂教ハ
まなり

解ハ平家ハのはちとて平され梅咲しつと世に上
解ハ初秋に祝つれく空世の蓮のうにやる後生
是処の契しつとあ

さくられつれとく人ぞきり家もいひくしぬ人さ
今も別れしつり
齋といふものの味いさくられつれとも真山のや
ま玉と蝶よらうと多きうなましりまもくく骸は
田島のこやとあるとも此の門と字うく天下の鬼
を防くを功解舞も及よらう

されと人ハるまの四季とくちとく魚は四時の部
詠形一俳人兼く魚と品むとすりハカつら味の
貴殿と捨きりあがり うれとあよみハ平目のあよ
とまりとく今ハ世界ありとてとまりに似れと
このやよまもさまとわらうによみとく菓のえら
うらうとまとのけはと及とぬハ答はあよらよ
さるやまに口惜しと人のいひるさるまき初
あつとあつとあつと

葉山子辞

わらとせしあつとあつとあつと山田の畔り
ひらりいさうとあつとあつとあつとあつと
うらり例の口さうとあつとあつとあつとあつと
とさうとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
をけりとの外に名士乃弓箭と功あるとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
てあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

うく射る時に中らにちるもをりれさりととよみなる
分のかさあつるやりの奥州の吟信も夫を殺さしめて
徳はあつりそり麟の角をさくこれとも肉ありと物を
やうにむりたるは言射もあを刀に刃の筋をのりて
しそりしとく人よハち先ら出つれあつと物とやあり
きとあひく後りの功をささむとらるゝ悪報のあらざる
しとやりの彫としかをさゆらるや九方甲にぬらうとく
翼垂天の中をぬらうとくちりちひく徳のうよゆらり
よくこのかさあつるあつとく我をみつくとく報
しとくみらるゝ笑えとらるや 雀あつともはよよまれ
とらるの大彫れまよ羽らるゝ花あつれ例乃大嘘に
斤彫れよあつとくに飛ぶ今もあつれ実ありとくこの

実をゆきし心世に露とらるあのかよあつとやの齡ハ
こつとらる世とらる今もあつたるく大空に居られおハ
矢にちる世殺ハあつとくに何れのあつとく争ハ
求らるはあつとくにさつとくも思まらる其功よに出るも似
とれとらるのあつとくにこれとらるあつとくに四の解と
あつとくに世とらるつとらるれあつとくにさつとくに世の
愁とまらるれとらる一世界中の人よハ昔れねあつとく枝
乃祈らる求らる深茅うあつとくに世とらるつとくに心よとらる
ゆらあつとくにあつとくに縮らるまらるあつとくにや五湖よ
棹さつとくに善望の産とらるさつとくに他とらるつとくに我と
あつとくに昔にいよへつとくに昔とらるあつとくにあつとくに
とらるは花とらるあつとくにあつとくに

あゝいしゆむしーとらあ虫にありとふくまねどく
ありとくまらりる

蠶乃せ涯ハ世の乃子終り火とりむーハさうさあに
カさろけや塔塔ハさうあきさーにいろれ草
くまむーハち物とき乃請とあねりさハ俳諧さる
との俳諧さあ人のくーおああー

ありー室の名によられくむむーハやさーくさ
虫ハリやー

蟻ハ鳴られみりそーく世のいとあみは際あき人よハ
似り東西ハ聚散ー餌を求くやまをいつく槐安
の都をのれくとの乃の安きささねむさりちさり
あーきさるに穴といさささく千丈の塔と崩をへん

掩ハ歐陽氏ハ惜まれ紙魚ハち浦子ハありねまる
狗の歯に噛くさきハさくーあーく猪のまにさー
らるく風ハのささるさー

風と千子歡喜と呼よち抽煙ハ権糸とらさる
権糸ハ吳名さるやけらくさささるや生塔金
ありさー

蝸牛ハ只さるにささるのささるさるにちさるん家
持れれともゆくささると夏ハあさるさるの要さ
かも似る

地性別のみささるささるささるささるささるささる
のねあさハさ用のささるささる

皆塔の慶ささるささるささるささるささるささるささる

いふあつ人のいふことさういふことあるー

懈のあぢみよいしよ入まよふとあぢれいふ事ある
を覚ふにのしよふたしとぢ申へ人よにぢしり

促織鈴虫くらつとぢいふ事あるぢしりさよく名よ
よへるぢぢいふ事あるぢしりさよく名よ

いふあつん毛せしひくしよま申まの国一各よ
松を枯一人よとまよふ事あるぢしり

いふあつにほせきぢぢいひぢしり殺生とよとぢぢ
ぢぢいふ事あるー

まろくそつしりしよせしり人のいふ事あるぢしり
岸にらむ虫に我しり只方のよひあけくらんと蒼

虫乃父がし呼に守ふの妻とぢしり他とされ少
父のここの事ある母とぢしり

ぢぢいふし限あつとぢぢ卯月のはぢぢぢぢ
しよたアもしよぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

この續を布ハせあるの寛保のころより
 室多磨のころ一免の比まての道行をわ
 抄出と

末僚 六林

狂歌言葉元末 <small>元盛綱先生著 はまわねのり 全一冊</small>	増補淡のまらこ <small>同先生著 狂歌のまらこ 全一冊</small>	狂歌何のまらこ <small>同先生著 折本小本一冊</small>	新古今狂歌集 <small>同先生著 前編二冊 後編二冊</small>	狂歌上段集 <small>光大人撰 全部二冊</small>	晴天鬪歌集 <small>同大人撰 全部二冊</small>	狂歌左鞆繪 <small>後満先生撰 全部二冊</small>	略解千字文 <small>我術奇先生撰 全一冊</small>
曆日諺解 <small>はまわねのり 全一冊</small>	東都勝景一覽 <small>浅草庵市人大人撰 狂歌彩色むら 全二冊</small>	東都あづむら <small>同大人撰 狂歌まらこ 全二冊</small>	画本職人鑑 <small>万載亭主人著 狂歌彩色むら 全一冊</small>	画本潮来集 <small>富士唐九大人著 彩色むら 全二冊</small>	忠臣水滸傳 <small>山東京傳老人著 前編五冊 後編五冊</small>	戲場年中鑑 <small>萱竹里先生著 全三冊</small>	書肆 <small>通油町 首屋重二郎梓</small>

